

日本古代の族民について

前之園 亮 一

はじめに

日本古代史の研究は、戦後、飛躍的發展を遂げつつある。それはまた一面からいうと、まさに学説の戦国時代の様相を呈している。「族」についても、いわゆる族民論争なるものが、多くの人々によって展開され、それぞれに新しい業績が発表されている。しかしながら先学の高説のうちにも従えないところもあり、また別な研究の方法や利用できる史料が、他にも多少残っているように思われる。そのことについてここに所感を述べさせていただくと思う。

ところで「族」とは、八世紀の戸籍、計帳や『続日本紀』（以下『統紀』）などに散見し、カバネの下に族の字を付した一種の下級のカバネと考えられるものである。例えば、大宝二年の美濃国戸籍に国造族石足、五百木部君族尼元など、（氏十）カバネ十族十名というぐあいに記されているものを言う。そこで従来問題にされてきたのは、第一に、族というカバネを持つ

人々は、氏が同じでカバネを持っている人々の親族・同族であるのか、全然そうではなくて、部民のごとき隷属民であったのか。一例を挙げると、国造族は国造の親族同族か、あるいは隷属民かという問題である。第二に、そのような人々の存在は、大化以前の古い時代にまで遡れるのか。第三は、族というカバネは、いかなる理由で、いつ頃与えられたのか。以上が大体の論点となるものである。そして『部民成立以前のウジの従属集団を復原するものとして提起された「族民」論は、中小豪族層内部の身分構成を明らかにするうえで、より多くの知見をもたらした』（岩波講座『日本歴史・古代4』三八三頁）ものといえよう。以上「族」に関する問題の所在を一応明らかにしたので、次に学説の紹介に移ろうと思うが、その前に、用語の意味を明確にするため、氏＋カバネをカバネ姓、氏＋カバネ＋族を族姓、氏＋人を人姓、（例、秦人、漢人）氏＋部を部姓、（例、木部・物部）、なお氏のみでカバネのないものを無カバネ姓、（例、春日、牟下連）、氏もカバネもないものを無姓と呼ぶことにしたい。「族」とは、いわゆる族姓のことである。

一 学説の紹介

後戦の代表的な学説として、直木孝次郎、井上光貞、平野邦雄三氏の説がある。「族」について始めて本格的に研究された

のは直木氏で、「日本古代における族について——族民の研究——」、「再び日本古代の「族」について——井上光貞氏の批判に答える——」(『日本古代国家の構造』所収)等の論文における氏の説の要旨は、「①カバネ姓者(＝有姓者)と(これと氏を同じくする)族民とが親族または同族であるとしても、両者は社会的に対等の地位に立つ親族同族ではなくて、両者の間には階級的な差が存し、族の字はこの差を現わす標識として下級者すなわち族民の姓に付加されたものだと考える。いいかえるならば、族民は氏を同じくするカバネ姓者を中心としその親族及び非血縁者を含む同族団の下部組織をなすもの。②族民を下部組織として有する豪族には、大化以前からの古い伝統を有する地方在住の中小豪族、特に国造級のものが多く、③従って「族」の称の成立の時期は大化後であっても、実態としての族民(同族団の下部組織としての族民の実質)が形成された時期は、大化以前のかかなり古い時代と考えられる。④豪族団の下部組織という点では、族民の実質は、部民と類似した性質を持つことになるが、族民の起源は部民より古く、豪族団の下部組織としてはじめ族民のなものが一般的であった所へ、後から大陸系の部民の制度が輸入され、次第に族民による組織にとって代ったのであり、部民を持つ以前の社会、すなわち紀元三、四世紀頃の社会の基礎をなす階級は、族民によって想像される同族団的性格のものである。」(直木氏前掲書八六頁)とされる。全体的に興味深

い説である。

次に直木説と対立するものに井上光貞氏の説がある。氏は『「族」の性質とその起源』(『日本古代国家の研究』所収)の中で次のように主張されている。『統紀』の天平勝宝三年五月丙午条の「伊蘇志臣東人親族廿四人賜三姓伊蘇志臣族。」という記事を重要視して、「族姓は有者の隷屬民に対する表徴ではなくて、有姓者の親族または同族に授ける一種の姓である。族姓は遠く三、四世紀におこった部民の一形態の遺制ではなくて、天武朝の八色姓にもとづく賜姓制度の産物であった」(井上氏前掲書一七五頁)。その論拠として、族姓が卑姓のカバネ姓者の同族にのみ授けられている事実から、『全く姓をもたない一族があって、かれらに新しく姓が授けられたとしよう。この場合にも賜姓には制限があるわけであるから、一族の上位者は、姓を有するが、下位者は姓をもたないという場合が、必ずあり得べき道理である。私は「族」という一種の姓は、このような場合に授けられると考えるのである。』(一六三頁)とされる。説得力ある説であるが、氏の説はほとんど『統紀』によっており、戸籍、計帳などの比較的豊富な史料を全然といってよいほど使っていない。

つづいて平野邦雄氏にユニークな論考がある。それは「無姓と族姓の農民」(『大化前代社会組織の研究』所収)に展開されているもので、『族姓はカバネをもたない同族に授けるのではな

く、戸籍制のしかれるころ、とくに地方豪族の配下には、まだ「氏」の名を与えられない農民があり、また帰化人にも氏のないものが多かったから、かれらに「某族」を授けて、「氏」を仮称させたものと考えている。『平野氏前掲書一〇頁』、『七世紀末においても、なお「無姓」「族姓」である農民があり、かれらは当然、社会的には下位身分のもので、単に豪族の同族ではなく、その配下の民であつたはずである。しかも、「某族」の名で戸籍に付されることによって、豪族の「族氏」となつたのではなく、「公民」に編入されたのであり、この段階でそれは顕在化したのである。おそらく族姓は、天智天皇の庚午年籍で一般化したものとおもう。』(一一頁)と言われる。即ち氏の説は、氏・カバネの発生、成立の大きな観点からとらえられたもので、新に無姓の農民の存在を想定されている点は、またきわめて示唆に富む説といえよう。

これまで紹介してきた「以上の対立する学説のうち、後の二説は、族姓を政治的・制度的所産であるとみて、律令制の発達しはじめる七世紀末に、主として一律に設けられたとみる点において共通し、前の二説(平野氏の原文では石母田、直木説をさす)は、族姓を古い親族共同体や、三、四世紀ごろの民族的共同体などの社会組織の遺制であるとする点において共通する。」(一一頁)というのが妥当な評価であらう。ところで「族」に関する史料は、直木氏が広く蒐集、整理されたことく多数存在する

が、断片が多く、ここでは、比較的まとまつたものとして、また利用価値あるものとして、大宝二年の美濃国戸籍をとりあげ、主にこれによって論を進めることにしたい。しかし他の史料は勿論「統紀」の記事の重要性についても、井上氏の指摘どおり十分考慮に入れなければならない。私の論述の内容についていえば、先ず「族」の八世紀における豪族団内部、村落内部でのありかたから考察し、大化以前にはどうであつたかということに及ぶものである。また本論を進める上で、用語の意味を明確にさせるため、親族とは血縁者を、同族とは擬制的血縁者を多分に含むものとしておきたい。

二 「族」の婚姻

族姓者の婚姻については、族姓者同志の婚姻が圧倒的に多く、その閉鎖性、排他性がよく指摘されてきた。しかしながら族姓は、カバネ+族が原則であるから、カバネ姓者との関係を特に重要視することが大切ではなからうか。このような観点から美濃国戸籍を使って、カバネ別の婚姻を調査してみよう。次のカバネ姓者の婚姻表(第一表)は、国造、県造、県主、栗栖田君、五百木部君が、どのような人々と結婚しているかをカバネ姓戸内のカバネ姓者の婚姻として、以上五氏、十一戸の例をひつくるめたもので、厳密なものではないかもしれない

が、一応婚姻形態の大体の特徴が出るものと思う。(嫡系とは、戸主の母と妻、嫡子の妻をいう。傍系とは、戸主の庶母、妾、嫡子の妾、また嫡系以外の戸口の夫、亡夫、妻、妾のことであるが、異姓戸口の婚姻は含まない。数字は、件数と百分率を示し、カバネ別婚姻率は、例えば、カバネ姓者の全婚姻件数三十一件の中で、族姓者との八件はどれぐらいの割合を占めるかを表示し、嫡系婚姻率とは、嫡系のカバ

第 1 表 カバネ姓者の婚姻相手と件数

婚姻相手	嫡系	傍系	計	カバネ別婚姻率	嫡系婚姻率
カバネ姓者	8	6	14	45.16	66.6
族姓者	2	4	6	19.35	16.6
無カバネ姓者	0	3	3	9.68	0
人姓者	1	1	3	9.68	8.3
部姓者	1	4	5	16.13	8.3
計	12	19	31		

第 2 表 族姓者の婚姻相手と件数

婚姻相手	嫡系	傍系	計	カバネ別婚姻率	嫡系婚姻率
カバネ姓者	4	5	9	7.89	9.76
族姓者	21	34	55	48.25	51.42
無カバネ姓者	2	4	6	5.26	4.82
人姓者	6	10	16	14.04	14.63
部姓者	8	20	28	24.56	19.51
計	41	73	114		

第 3 表 無カバネ姓者の婚姻相手と件数

婚姻相手	嫡系	傍系	計	カバネ別婚姻率	嫡系婚姻率
カバネ姓者	0	0	0	0	0
族姓者	0	2	2	13.3	0
無カバネ姓者	0	1	1	6.6	0
人姓者	0	1	1	6.6	0
部姓者	5	6	11	73.3	100
計	5	10	15		

族、県主族、不破勝族、神直族四氏、二十八戸の婚姻である。表より、族姓者の婚姻相手は、族姓者同志、人姓者、部姓者に大別できる。嫡系の婚姻も同傾向であるが、嫡系の場合、カバネ姓者との率が高くなっており、逆に部姓者との率が低くなっている。即ち族姓の戸主や嫡子は、部姓よりもカバネ姓の配偶

ネ姓者の婚姻件数十二件の中で、族姓者との二件はいかほどの率になるかを表わしたものである。以上の約束は第五表まで共通するものとする。なお百分率は、小数点第三位以下を四捨五入した。① 第一表より、カバネ姓者との婚姻関係が深いのは、無カバネ姓、人姓、部姓者よりも族姓者なのである。② 第二表は、国造

第 4 表 人姓者の婚姻相手と件数

婚姻相手	嫡系	傍系	計	カバネ別 婚姻率	嫡系婚姻率
カバネ姓者	0	1	1	1.18	0
族 姓 者	2	4	6	7.06	6.6
無カバネ姓者	0	1	1	1.18	0
人 姓 者	23	44	67	78.82	76.6
部 姓 者	5	5	10	11.76	16.6
計	30	55	85		

第 5 表 部姓者の婚姻相手と件数

婚姻相手	嫡系	傍系	計	カバネ別 婚姻率	嫡系婚姻率
カバネ姓者	2	2	4	3.2	4.4
族 姓 者	5	3	8	6.4	11.1
無カバネ姓者	0	8	8	6.4	0
人 姓 者	4	7	11	8.8	8.8
部 姓 者	34	60	94	75.6	75.5
計	45	80	125		

者を多く望んだということになり、件数でみると、カバネ姓者との婚姻は四十一件中四件（傍系は七件中五件）である。このことは反面、傍系の族姓者がカバネ姓者と結婚する場合、ある程度の家格上の制約があったことを物語るものではないであらうか。③第三表の春日、都布江、肩々、他田の四氏、五戸の無カバネ姓者の婚姻相手は、部姓者と族姓者に大別できるが、嫡

系婚がすべて部姓者とのみであるのは注目される。このことから、無カバネ姓者が、部民のごとき隷属民であったとは、必ずしもいえないが、県、牟下都、栗栖田、肩々などは、県主あるいは県造、牟下君あるいは牟下造、栗栖田君、国造の私的隷属民ではなかったかと考えられ、族姓者より下位の人々であったらう。

④第四表は、秦人、漢人、神人三氏、二十六戸の人姓の婚姻である。その主な婚姻相手は、人姓者同志、部姓者、族姓者に大別できる。嫡系婚では、人姓者同志、部姓者が主な相手であり、部姓者との十件中、五件までが嫡系婚で高率を示している。また人姓者同志の婚姻が圧倒的に多いのも注目されるが、もっと重要な意味をもつのは、カバネ姓者との婚姻が、わずかに一件であり、この一件は例外と考えられ、このことが、人姓者と族姓者の身分上の格差をよく示すものであろう。⑤第五表は、部姓の十七氏、五十一戸の婚姻である。部姓者同志の婚姻が圧倒的に多く、嫡系婚についていえば、カバネ姓者との四件のうち二件、族姓者との八件のうち五件と件数が多くなっているのは、嫡系の部姓者でないこと。カバネ族姓の配偶者はあまり望めないということになろう。これまで述べてきたことから、他系に比べて、カバネ姓者との婚姻関係における族姓者の優位が、わかってきたのではなか

ろうか。決定的数字は出てこなかったが、身分、家格的に族姓者はカバネ姓者につぐ位置にあったもののようである。従って、『統紀』の「伊蘇志臣東人親族廿四人賜姓伊蘇志臣族。」という「親族」とは、井上氏の言われるとおり、親族・同族の意味に解してもよいであろうが、純血縁者というよりは、擬制的血縁者も含まれる同族と見るべきではなからうか。

三 族の経済上の位置

「族」の身分については、右に述べたので、次に階級的立場をある程度反映すると思われる「族」の経済的位置について考えてみる。さいわい美濃国戸籍には、各戸に三政戸と九等戸の別が記入されているので、特に経済的事情を等級づけたいらしい等戸について論を進めて行きたい。先学の研究には、「族」の経済的立場を取扱ったものがほとんどといつてよい程なく、多くの未開拓の部分が残されているようである。ところで等戸とは、岩橋小弥太氏によると、「資産の多寡によつて九等にしたものである」と思はれる。『上代食貨制度の研究・第一集』一三頁という。また宮本敦氏には、「美濃国戸籍に於ては九等戸の外に、上政戸、中政戸、下政戸と云ふ丁数による記載が既に指摘されているので、その九等戸は義倉の場合に於けるものと考えられ、貧富の差によつて決定されたものと云はねばならな

第 6 表 カバネ別九等戸

カバネ 等 戸	カバネ姓	族 姓	無カバネ姓	人 姓	部 姓	氏姓不明	計
中 下 戸	2					1	3
下 上 戸	0	2		1		2	5
下 中 戸	2	6	1	4	3	5	21
下 下 戸	6	22	4	21	46	33	132
計	10	30	5	26	49	41	161
下中以上(%)	40	26.6	20	19.23	7.61	19.51	18.01

い。』(『史学雑誌・第61編、第8号』)と主張されている。ただいかなる規準によつて九等にしたので明らかなでないが、とにかく美濃国戸籍のみにみられる等戸は、それぞれの戸の貧富を記したものである。第六表は、等戸が明らかな百六十一戸をカバネ別に整理したものである。(氏姓不明戸というのは、山方郡三井田里戸籍の冒頭総計による。数字は戸数と百分率である。小数点第三位以下四捨五入。)この表より、下中以上の戸は、全体の十八パーセントにあたり、おそらくこの二十九戸はそれ

第7表 下中以上戸

[illegible]

数字は人数を表わす

それの村落内における富裕戸で、上層に位置するものである。下中以上率では、カバネ姓が断然高いが、次に族姓が続き、無カバネ姓、人姓は相当落ち、部姓は極端に低い。下中戸は二十戸と比較的多いが、下上、中下戸になるときわめて少

戸で、族姓戸がきわめて多いのが注目される。これより、族姓戸には資産ある有力戸が多かったということがいへはしない。以上等戸にみる限りでは、族姓戸の経済的優位は、カバネ姓戸についてほぼ決定的である。

なくなり、この八戸は単に村落においてのみならず、郡内でも大戸に属するものではないだろうか。しかもそのうちの二戸が、族姓戸であることを見落してはならない。この八戸は、後世の殷富、富豪の前身と考えられないこともないのである。

次の第七表は、下中以上の有力戸を順次列挙したものである。この二十九戸のうち、カバネ姓が四戸、族姓が八戸、人姓五戸、無カバネ姓一戸、部姓三戸、氏姓不明が八

従って族というものは、無カバネ姓、人姓、部姓と同列に置かれるべきものではなく、むしろカバネ姓と同階級といつてよいであろう。しかしながらそこには、婚姻の件数からして、身分、家格上の差が存在するものと思われるのである。ただし今まで見てきたのは、八世紀初頭の美濃に限られているが、「族」の存在を確認できるのは、ほかに畿内とその周辺地帯である。

いま畿内の「族」について調べてみると、天平五年の右京、神龜三年の山背国愛宕郡出雲郷の「族」は、美濃と対照的に劣弱である。それは、カバネ姓者がきわめて多く、逆に族姓者の少ない所では、またカバネ姓者の多くが、下級官人として律令体制の末端に連っている畿内では、古い共同体は完全に崩壊しつつあり、古い共同体関係の遺制たる「族」が、優位に存在できる余地はまったくなくなってしまっているからである。すでに畿内においては、カバネ姓者と族姓者は身分、家格上の差にとどまらず、階級上の格差を示している。従って「族」を古い共同体の遺制としてとらえる点では、私見は直木説と共通するものである。古い共同体が根強く残っている地域では、美濃の族姓者、尾張国中島郡の郡司としてみえる国造族、越前国江沼郡山背郷の郷長たる江沼臣族忍人など、在地の有力者として存在し、カバネ姓者とは階級差をみるにまで至ることが少なく、おおむね身分、家格上の差にとどまっているらしくおもわれるのである。

四 「族」と官位

八世紀は法典、官制の整された律令国家であり、その体制内で有利、優位に存在するためには、先ず官位を獲得することが重要な意味をもってくる。当時の有位者はほとんどカバネ姓者であつて、人姓、部姓者は極めて少ない。さて族姓者はどうであらうか。ここでは、「族」の官位について考えてみる。直木氏は、「第四表、族民官位表」（直木氏前掲書五二頁）、「第五表、部姓者郡司軍団職員表」（五六頁）を作成され、部民の後裔である部姓者よりも、族姓者は官位を有する者が少ないことから、地方における族姓者の地位が概して低いものであると考えておられる。確かに、史料に現われた有位有官の族姓者についてみると、限りでは正しい見解である。しかしながら族姓は、氏自身が指摘されるごとく、カバネ+族が原則であつて、『統紀』の神龜二年十月「庚申。天皇幸難波宮」。○辛未。詔近_レ官三郡司授_レ位賜_レ禄各有差。國人少初位下掃守連族_三山等除_二族字_一。」とあるように、族字を除かれ、カバネ姓に上昇した例がある。なお直木氏の「第一表族民年代一覧表」（四五頁）にも載っていない「族」の史料があるので、ここで簡単に紹介させていただく。

それは、『大日本古文書・十二』（二七一頁）造東大寺司享經用度申請解案帳に、『天平勝宝四年四月二十八日主典從七位上阿刀連_{（能消）}「族」』とあり、『同書・同卷』（三四六頁）造東大寺司解

(族(酒主)

案に、「天平勝宝四年八月七日主典從七位上阿刀連挨」とみえる。酒主はこの二件のみ族と記され、他の文書ではすべて阿刀あるいは阿刀連と記されている。また『古代人名辞典・第一巻』(阿刀連酒主)によると、酒主は無位から從六位上東大寺政所主典にまで至っている。酒主を元来族姓者とする、無位から次第に考を積み、始めて官位を得たころ族字を除かれて阿刀連に上昇し、五位の壁は破れなかったが、從六位上造東大寺司主典にまで至り、「族姓」(考・貫↓官位・カバネ姓)というコースを歩いた族姓者の一例とも考えられるのである。前述の掃守連族広山、この阿刀連族酒主は、幸いカバネ姓上昇への経緯が知れるが、史料上に単に有位有官のカバネ姓者としてしか現われていないか、の族姓者が、相当いることを類推させるものではないであろうか。即ち現存史料に族姓の有位者が少なく、その官位の低いのもあって、「族」の性質を云々するのは、いささか危険ではないだろうか。それよりも、族姓はカバネ+族が原則であって、族字を除かれるとカバネ姓に自動的に昇格できるという基本的性格を十分考慮する必要がある。また族姓者が官仕によって叙位され、雑役でないまともな官職を得たころ、族字を除かれ、カバネ姓者になった後、始めて史上に現われたとすると、いきおい有位有官の族姓者の史上に現われる数は少なくなるということを注意しなければならない。私は族姓者が概して劣弱であったとは思わない。例えば、『統紀』

第 8 表 美濃国戸籍の有位者

里	位 階	有 位 者	戸主との関係	年齢	乱当時
春 部	務從七上	国 造 族 甥	戸 主	77	47
春 部	務從七下	国 造 族 雲 方	戸主伯	57	27
春 部	務從七下	国 造 族 鳥 手	戸 主	69	39
半 布	務從七下	県 主 族 都 野	戸 主	59	29
半 布	務從七下	不破勝族吉麻呂	戸 主	58	28
半 布	追正八上	県主族津麻利	戸 主	60	30
三井田	追正八上	五百木部君木枝	戸 主	61	31
三井田	追正八上	五百 木 部 東 人	戸主弟	55	25
三井田	氏姓不明の有位者が他に 6 名いる。				

みた。従来の「族」と官位の関係を立入って研究されているのは、直木氏のみで、まだ解明すべき余地が多く残されているように思われる。

以上で八世紀の族についての大まかな考察は終ったことにし

の掃守連族広山、伊勢直族大江、宍師君族古麻呂、物部連族子嶋が、カバネ姓者に上昇したり、無位や低い官位から一挙に五位に叙されているのを見ると、彼等なんらかの大量の物資や労力を貢納、提供したからであるらしく、このように族姓者には、富裕な人々が少なくなかったのでは、と考えるのである。以上、直木氏の「族」と官位についての考察にヒントを得て私なりに考えたことを述べて

て、次に美濃国戸籍の有位者に焦点を合せ、「族」と壬申の乱との関係を通して、大化以前の「族」へと遡源を試みることにしたい。第八表は、野村忠夫氏の「第二表御野国戸籍の有位者」(『律令官人制の研究』六六頁)を参照して作成した。氏は「御野国戸籍の有位者が、壬申の乱の勲功による授位であると推測されるのである。」とされた。そしてよく注意して表を見ると、氏姓の明かな八人のうち、国造族三人、県主族二人、不破勝族一人と、族姓者が六人を占め圧倒的に多い。これを単に彼らが勇敢で軍功を挙げたためだというだけでは説明にならない。別に理由を求めるなら、族姓者は、氏を同じくするカバネ姓者の同族で、経済的にも在地の有力者として村落内部でも上層に属していたことは、先にみたとおりである。従って大化以前には、族長の周辺に一応独立的生計を営んでいたものと思われ、八世紀の史料において族姓者が零落していないのは、それ以前に族長やカバネ姓者のあらわな支配、収奪を受けていなかったことを示すものであろう。日常的にはゆるやかな統制のもとにあったが、一旦祖先神の祭祀や戦争等の非日常的状況が発生した場合には、やはり族長の強い統制を受け、同族意識に結ばれて結集し、臨時応急に物資、労力を提供したと考えられるのである。このような同族内部の古い共同体関係は、壬申の乱頃までは相当根強く残っていたであろう。即ち大化以前の「族」は、中小豪族団の族長を中心とする「司祭サークル」の構成員であ

り、軍事的には族長の親族(カバネ姓者)と共に豪族軍の精兵を形成したのではないだろうか、有位者八名中、六名を族姓者で占めているのは、かような関係の遺制が反映しているもので、族姓者(後述のようにこの時点ではまだ族姓は付与されていないらしい)は、旧族長の統制下にカバネ姓者と共に、旧隸属民をも徴発し、強固な同族意識で結ばれた豪族軍の下士官的役割をになう精兵として壬申の乱に従軍し、その行賞として乱後叙位されたのであろう。『壬申紀』には多数の人民が動員されている。それならもつと多く部姓、人姓者も叙位にあずかってしかるべきなのに、部姓の有位者は五百木部牛一人しかみあたらず、しかも追正八位上で、族姓者より低い官位である。これはおそらく階級的差別を受けたからであり、族姓有位者が多いのは、逆に階級上の優遇を受け、またその族長を通じて行賞を要求できたのであって、無カバネ姓、人姓、部姓者より、行賞という点でも優利であったと考える。ただ問題なのは、族姓者より身分、家格的に上位であるはずのカバネ姓有位者が、追正八位五百木部君木枝一人のみであるということである。しかしながら乱の功臣村国連男依とその子孫が、美濃の一小豪族から「男依の殊功を契機にして、村国氏の本系(男依の子孫)が中央貴族官人氏の末席に編組され、定着していった」(野村氏前掲書六八頁)例があり、山背国愛宕郡出雲郷の出雲臣集団は、功臣出雲臣豹の一族であるらしく、その出雲臣集団は、中、下級官人集団化

への積極的動きを示しているなど、この二例をみる限り、壬申の乱で官位を得た美濃のカバネ姓者の多くは、中央の中、下級官人として出仕し、本質を京畿に移してしまつたからではないかと推測する。そしてこのことは相当重要な意味をもつてくるのではなからうか。即ち族姓者は、部姓、人姓、無カバネ姓者より行賞面で優遇されたが、カバネ姓者に比べ、身分、家格上の理由から官人への道が狭く、中には中央の官人となり、更にカバネ姓に上昇したのもいたであろうが、多くは在地にくすぶらざるをえなかつたのではあるまいか。いかにすれば、族姓者はカバネ姓ほどよく、新しい歴史状況に都合よく乗り出すことができなかったのである。このような点が、単に身分、家格的差というような心理的、序列的で大して衣食住の増減に直接関与しないものとしてあるのみでなく、律令体制の整備にともなつて、カバネ姓者と族姓者の格差は、支配体制側にまわりえるか、被収奪者に転落してしまうかという現実的、切実な格差に変質していくという潜在的性質を古くから孕んでいたという点に注意すべきではないかと思う。ところで美濃国戸籍の有位者の官位は、正・直・勤・務・追・進という天武十四年冠位制の跡をとどめている。族姓は伊蘇志臣族の例のように、行賞として賜与される場合があるので、天武十三年の八色姓制定、翌年の冠位改正のころ吉野側に立つて従軍した中小豪族の同族に対する行賞として、彼らに始めて族姓が付与されたのではないで

あろうか。即ち新姓、新官位の一連の制度の成立と関連づけて、族姓付与の起源を考察する方法を次に試みようと思う。

五 壬申の乱と族姓の起源

族姓付与の始まつた時期はいつであらうか。族姓は、人族、部族の例が無いことから考えて、決して大化以前に遡るものではないであらう。直木、平野両氏は、造籍制の所産として庚午年籍に求められ、井上氏はそれより下つて、天武八姓の賜姓の所産とされ、それ以後の造籍の過程で一斉に付与されたとされる。族姓は、真人、朝臣、宿禰等の貴姓には全然みえず、中、下級のカバネを持つ特に地方の中小豪族や帰化氏族のカバネに多いのである。私は井上氏が、『全く姓をもたない一族があつて、これに新しく姓が授けられたとしよう。この場合にも賜姓には制限があるわけであるから、一族の上位者は姓を有するが、下位者は姓をもたないという場合が必ずあり得べき道理である。私は「族」という一種の姓は、このような場合に授けられると考えるのである。』と言われるのに略々従いたい、なにも「全つたく姓をもたない一族があつて」と言われずともよいのである。例えば、国造族、県主族、尾張連族の場合、美濃の本果国造、県主、尾張の尾張連が、八色姓制定以前に国造、県主、連のカバネをもっていなかったとは、とうてい考えられない。それで私は、族姓を単に天武十三年の八色姓制定による

制度的所産とするにとどめず、それ以前の歴史的要因を提起したいと思う。即ち壬申の乱に吉野方として従軍した中小豪族の同族に対する行賞という点に族姓発生の歴史的要因を求め、八色姓制定の時点で始めて彼らに族姓が付与され、翌年の冠位改正によって更に新官位を授けられたのではない。なおその後の造籍の過程で、多くの無姓の農民、また日本の氏もカバネも持たない帰化氏族に対しても一斉付与が行われたと考える。一々根拠を挙げて説明することは、紙数の関係上できないが、吉野側の将として活躍した人々は、乱後の行賞でカバネが昇格した例が多くある。またその出自の低さにもかかわらず、破格の高い官位を与えられてもいる。それで行賞にあずかった本人やその親族が、本姓より高いカバネに昇格した場合、それより下位の親族は本姓にとどまり、もっと下位の同族は本姓の下に族字を付して行賞としたのではあるまいか。例えば、尾張宿禰―尾張連―尾張連族がそうであろう。しかし本姓より上昇したといっても、宿禰以上のカバネを賜与されなかった場合、例えば、書直知徳が文忌寸に上昇したなら、その親族はすべて文忌寸となり、それより下位の同族には新姓に族字を付して、文忌寸族としたと考えられる。即ち宿禰以上に昇格した氏は、その内部に宿禰―本姓―本姓＋族というようなカバネによる三階の序列を持つようになり、本姓から宿禰以下のカバネに上昇した氏は、新姓―新姓＋族というカバネによる二階の序列をもつと

考える。伊蘇志臣族に例をとると、伊蘇志臣―櫛原造―櫛原造族とはならず、伊蘇志臣―伊蘇志臣族という構造をもつようになったのは、宿禰以下の臣を賜姓されたからであり、また氏・カバネを同じくするということが、親族同族であるという一つの標識であったからであろう。かく考えると従来異論の多い伊蘇志臣族の賜姓もよく説明できるのではなからうか。また尾張氏が一族内部に宿禰―連連―族のカバネの三段構造をもつといっても、宿禰を称する一族は、宮廷貴族に昇格した尾張氏で、別格として扱わねばならない。従って天武八姓以後、地方豪族内部のカバネによる序列は、氏・カバネを同じくするカバネ氏族の二段構造を概して持つようになったと思われる。最後にことわっておきたいのは、私のいう無姓の農民は、平野氏のいわれる無姓の農民とはいささかその意味、内容が違い、諸豪族のあらわな分割支配の争奪の対象になるような人々ではなく、豪族団の構成員としての有力な農民で、かつカバネ姓者の同族である無姓の人々をいうのである。

「族」についていろいろ述べてきたが、これは私なりの考えかた、史料操作の過程をしるしたまでであって、あくまでも研究ノートとしての素描にとどめ、史料の引用やその解釈、論拠の詳述を紙数の制限により削ったため、意味不通の箇所も少なからずあるであろうが、詳論は後日を期したい。